

四月作品

月集スバル



☆今月の四人☆

わらぢ虫

岡崎 康行 新潟

一分の黙禱と立ちて目をつむるこのくらやみが無限へつづく
幹ほそく群立ちて高き赤松は反動の意志持ちてしづまる
備へなきころにあふぐみちのくの粗き削りの不動明王
わらぢ虫冬の茶の間に迷ひ出てわが領分を駈け回るなり
こんくりの住処あばかれわらぢ虫逃ぐるあり留まるあり群衆に似る

山茶花

小島 ゆかり 東京

三歳と六十三歳あそぶとき太鼓のごとし冬の太陽
どうしてか笑ひとまらぬ孫とわれあかいさざんくわに囲まれながら

さざんくわの花をのぞけりをさなこは隠シカメラをまだ知らなくて
わが孫は高知へ帰りこの道のさざんくわはもとの山茶花になる
散りつぎてまた咲きつぎてさざんくわは過去のやうなり咲きつぎて散る

水柱

小嶋 一郎 佐賀

下校途次、学童われらを襲ひ来シグラマン一機の恐怖忘れず
グラマンは急降下して掃射せり咄嗟に伏せしわれら五人を
五メートルへだつる田面に銃弾は水柱立てきほひ走りつ
七十五年忘れてはゐらず九歳の身近かに浴びし機銃掃射を
敗戦をひと月のちと知る由もなくて戦意は削がれずありき

炊ぐたのしみ

後藤 美子 北海道

マッチ棒の太さにとある料理レシピマッチ使はずなりて久しき
大根を刻みつつはかな今日一日ほぼ飲食のことに暮るると
共に食むひとのあるゆゑわが炊ぐたのしみもあり夕餉ととのふ
たれか吾を呼ぶとあふげる夕空にひかり増しくる上弦の月
行けるかもしれぬと仰ぎし若き日ありマッターホルンのヘルンリ小屋まで

☆

☆



水島 晴子 兵庫

黒きまで濃きみどりなる葉の間にまもられて太しブロッコリーの花
川底に敷きて平たき石の間を縫ひつつゆけりささ濁る水
わがままに自由勝手に生きてよと子があらば子に告げたきものを
寒き日をぼろ裂の上にするわりをり茶色の犬の目もと悲しげ
一月の川のほとりにひらきゐてすみれ二輪のはなびら厚し

杜 沢 光一郎 埼玉

喉元を剃られつつあて刃物持つ人の不意なる狂気を想ふ
平成に戦争は無かつたといふけれど災害や自殺での死者らは無数
ごめんごめんと言へばわたしの性分も少しは優しくなるのであらうか
盆栽の白梅お正月に咲き始む地球温暖化のあらはれなるか
苛立ちやすきこと多かれど宇宙ゆく探査機の旅のことなど思はん
珊瑚礁をみながら埋めてアメリカの基地造るとふ日本政府が
民の意志無視して海を埋めゆくかウチナンチュ、ウシエーティナイピランド
たたみこも辺野古の海を埋め立てて基地造るなどあるべきならず
「海」の字を四股名に負へる人ゆかしとりわけ沖繩生れの二人
基地の島沖繩に知る人多し歌の友、同期生つつがあらざるや

武 田 弘之 神奈川

高野 公彦 千葉
世は漢し死海文書を読むこともなく大和歌読みて生きゆく
魚あまた養ふ琵琶湖、地図に見ればややや太めなる竜の落とし子
つばめ飛ぶさま思ひつつ(瞬転)の語意を調べてをり締切日
わが裡のトリビアリズム 肱川をヒジガワと呼ぶ人を許せない
スマホ生まれ金言一つ滅びたり(老人は生きた図書館である)

仲 宗角 三重

ムクロジの球実を山に拾ひきて洗濯なしのしかの日に母ぬき
奥熊野の尾呂志川の上流に霧は夜中の二時頃から湧く
ゆつくりと千秋刀魚を食ひをれば吉野越えきし風花獵犬をつれ来
斬にて殴りしはつりをなせる見る田舎暮しに他地者がくる
風邪の日は吉野葛煉り熱さすするシヨパンのノクターン十三番を聴き

奥 村 晃 作* 東京

荒川の上流と知る長瀬の景観は石が水が作れり
固く大きな石に我が立ち見下ろせる青淵水にマガモが泳ぐ
長瀬の青淵水に冬なればカルガモ泳ぎマガモも泳ぐ
シベリアから渡り来ていま荒川の淵にし泳ぐ二羽のマガモが
カルガモに交じりて泳ぐマガモ二羽あたまが緑く識別できる
陽にあそぶ雀のこゑと羽撃きと聞こゆる部屋にペン握りをり
カーテンに濃き翳おとし欄干に雀来てをり着替へてをれば
足もとに電流の鳴る音はして寂しく暮るる令和元年
おとろへは眼に著し朝に宵に心経唱ふることもいつまで
いつか行かうと憧れ合ひき雪被くアルプスの岳テレビは映す

森 重 香代子 山口



日影 康子 富山

初春の劔岳・立山晴れわたり近く厳しく異界めきたる

プロペラ機にグランドキャニオンの谷航きしかの日を思ふ年の始めに
枯れ果てし冬田の畔にクローバーの緑きひと群見出でて和む
軒下のプランターに咲く冬すみれ若き日の天鷲絨の肩掛けの彩
寒晴れの雪の山脈 嶺々はおのづからなる青き影帯ぶ

古屋 祥子 群馬

コスモスの六十年、われの六十年、過ぎし六十年の歴史重なる
山褒めはふるさと自慢、赤城山品格もちて端正、優雅

短歌のえにし今につながり贈りくれる下仁田葱は太くてあまい
バイオリン奏で聞かせるボランティア「聖しこの夜」最後に終る
クリスマスに縁なき昭和世代たち 音色に酔ひて涙もろしも

影山 一男 千葉

天皇を祝ぐ言葉あり出来過ぎてゐてうそ寒し芦田愛菜の瞳
皇后の涙がクローズアップされ妻には告げず肯ふわれを

公然の秘密となりし元号の命名者むかし縁ありし人
曇りよりあらはれ出でて巨き手は冬の櫂の影刻みたり
湾岸の寒風強き丘に立つ虚子の闘志のわれに湧き来よ

桑原 正紀 東京

可憎しき死を見送りて帰るさの夜ぞらに刺さる高層ビル群
生きて在ることもさむしよビルの間を吹く北風が骨しやぶり過ぐ
日病み猫に餌をあたへてほこほこと陽に温みをりこの世のほとり
料理するモチベーションに「食べたい」と「食べさせたい」とふた通りある
「食べさせたい」思ひの勝る妻を持つ男を果報者とぞ呼べる

狩野 一男 東京

地震とか豪雨に我ら日ごろからどんなそなへが出来るといふか
日本は災害大国なのだから日ごろの備へが肝心かなめ
あたらしく冬が訪れ、新しき年がきたればエキデンさわぎ
穏やかに正月三日ゐたいなら見てはいけない箱根駅伝
シード権五年以内に、十年で必ず優勝!とは徒夢か

宮里 信輝 神奈川

特養に長姉見舞へり配偶者も吾も認知せず「ひとりの世界」
父母の住む 鴨越墓園広大で今日もクルマで迷ひさまよふ
兄はガン長姉と次姉は認知症どうすればいい泉下の父母よ
老健も特養もみな空き待ちなりひしひしと日本老いたり
長兄のくるま椅子押し老健の窓ゆながめる明石大橋

木畑 紀子 京都

手助けをせしおばあさん声をかけし老犬もなくなりて、新年
短日の出窓にふたつ帽子被てびんのヨーグルト発酵中なり
飢うる子を救はんと一分告知あとなおるか飽食飽笑テレビ
目覚めたる寒の暁闇二十五年まへなる震度7の時刻ぞ
大地震の朝の息子の在宅をひそかにわれは天に謝しにき

島田 暉 神奈川

うつし世の時間を食べて生きつなぐ年寄り夫婦に戦あらずな
にが笑ひしながら雨の通り過ぐ年寄り夫婦の肩を濡らして
搾れどもひと滴だに水の出ぬわが老体は御神酒おみきいたたく
行き先は極楽などと言ひ交はし月の酒場でオデン酒酌む
降り出しし夕立の中急ぐなり雨にずぶ濡れわれ青き魚

大松 達 知* 東京

落つこちたカリフラワーが見つからずそれは落つこちていなかったから
若い人のやりたいようにやつてよね、すんすん言つてしまふ歳になる
手のひらをふたつひろげてお供えのように運べり紅天べんてんうどん
あの人はクレプトマニアだったのとその人を忘れたころ聞きたり
この人が褒めに褒めてる梅干しを梅干しらしくないとは言えず

田宮 朋子 新潟

ちかごろの人がつかふといふ PayPay スマホをもたぬわれには無縁
みつしりと電波とびかふ世なれども歌詠むときは圏外にゐる
Windows7 サポート終了し古きパソコン孤墨のごとし

拍子抜けするまで雪の降らぬ空ちちははは祖父母の知らぬ一月
明けがたの闇のむかうの鐘の音聞きとめてまた眠りに落ちぬ



津金 規雄 神奈川

「香水をつけています」とささやかれ面寄せうなづく閉店間際
公園の夜の風涼し歓楽の尺さし互みの影を歩ます
焦がれ死にせし人いくたり古今集恋の部に読む思ひの深さ
おほひ立つ樹々の葉だけが聴いてゐるやや噛み合はぬ酔後の会話
結ぶ手を恋人つなぎに換へてみる雨上がりたる夜半の園にて

小山 富紀子 京都

遠山に初雪降り天降りくる陽を踏み籠持ち七草買ひに
七十路の読み初めにとてちり払ふ若き日読みし「関寺小町」
思ひ深く生きし日もありあはあはと生きし日もあり七十路迎ふ
通し矢を引き終へまかる振袖の衿元少し乱れ初春
正月の最後の小もちまろまろとふくふく焼けて良き年ならむ

清水 正子 神奈川

「明月記を読む」は定家の夢の跡たどるおもひす輪読われら
定家さんとわれは呼びたし月一度の輪読なれど一年経ちぬ
水無瀬離宮跡をたづねし日のごとく鴨ひよがかしまし窓ちかく来て
大賞の「明月記を読む」上・下巻ほの明かりせり夜半の書窓に
歌ころ失せぬ妙薬かも知れず吟醸香よき「月と虹」を飲む

福士りか 青森

方丈の待合所にてバス待ては雪よけの屋根を打つ冬の雨
衰へゆく父とわが身を憂ひつつ買ひし除雪機ねむる一月
除雪機を買ひたれど雪の降ることなし「暖冬」にして冷雨降りつく
一月のなかば積雪ゼロセンチ心いらだつことの不可思議
雪かきをせぬはよけれどアイデンティティ崩るる令和二年暖冬



藤野 早苗 福岡

入寂にちかきわが猫浴室のつめたき床に身を延べてゐる
水も餌も拒みしだいに透りゆく自が命終を容れしわが猫
八年と九か月にて身罷りぬ南無三珍の御猫大師
たましひが喚び合ふやうに猫と子が出会ひしペットショップの一隅
メスを二度入れしうつそみ離りたる猫のたましひひんがしへ飛ぶ

風間 博夫 千葉

月周回軌道にひとり月面のふたりを待てり五十年前
縄文時代一万三千年以上続き貝食つて戦のあらず

長崎(一)「The Last Place on Earth」祈る「ラスト」であり続けるを
九日は長崎午前十一時二分「ファットマン」投下されたり
「核兵器禁止条約」いつまでもあれよ核兵器なき世となれど

田中 愛子 埼玉

鳶の鳴くあひだをしぼし止まりて冬の坂道また登るなり
いはゆる…と昼のニュースで言はれても「パパ活」といふ言葉を知らず
お隣の国と言ひまたあちらと言ひ母は触れたり死後の世のこと
詩心に触るるゆふかぜ吹きて来ず北の窓なき高層住宅
さわらびのもやう描けば便箋に早春の風かよひくるなり

橘 芳園 新潟

歎異抄に救はれたりといふを聞く何度読みても救はれぬわれは
心よくて殺さぬにあらず害せしと思ひてゐしに蛇を轢きたり
うつしよを生きて不足の欲ばりが死後のことまで考へにけり
なんびともすてたまはぬといふみほとけをころに持して生けるも快樂
生れたくて生れしにあらぬこれの世は去りがたくとも去らねばならぬ

水上 比呂美 東京

口紅より夕茜より深き緋のざくろの皮に紺瑠璃の差す
包丁で切れぬ柘榴の厚皮に裡より裂け目入るるものあり
ざくろ一つ黒コートより取り出しぬ子は内臓を取り出すごとく
実ざくろは魚族とおもふ体内に海をくぐりし水をたたへて
鮮血のやうな果汁を垂らしつつ柘榴を食めり十二月の夜

鈴木 竹志 愛知

また花を咲かせしぶとく生きてゐるセイタカアワダチソウは師走の末に
生き継ぐは楽しきことと言ふやうだ師走の土手のセイタカアワダチソウ
外来種ゆゑの不遇を受けつつもセイタカアワダチソウは根性で生く
政治家のありさま言ふにふさはしき言葉なりけり「安直」といふ語
かくもはや空しき言葉 政治家の使ふ「説明責任」大概にせい

原 賀環子 東京

パンドラの箱にのこりて一粒の希望となりき中村哲氏
医師の手にシヤベルを持ちてアフガンの枯野に命の水をひきたり
水の利に農地ひろげる力量の医師ナカムラをなぜ銃で撃つのか
亜麻布でつつみたき人アフガンの地に血をそめた中村哲さん
どこで生き、何をしたのか復刊の『アフガニスタンの診療所から』

水上 芙季 東京

令和二年六日目漏電ブレーカー落ちて静かな闇だまりにをり今の今(スマホヲミテルヒトシネ)といふ呪詛あらはこの車内みなゴムバンド、付箋紙、クリップ、ホッチキスはづしてコピーはづしてコピー広島へ行くゼムクリップ長崎へ行くゼムクリップ書類挟みて原爆の古き手書きの決議書にゼムクリップの鏽跡ありぬ

大野 英子 福岡

山の端をのぼる初日待ちながらくいと伸ばしたカレンダー貼るあらたまのひかり満ちる訪ふ人はなくとも目白がくる里の庭塗り腕を六年ぶりに取り出して盛り付けてゐるひとりの雑煮鄙びたる坂本八幡宮が好きだつた人溢るるを遠巻きに見る参拝に並び福みくじに並びお茶屋にならぶ平和であれかし

松尾 祥子 東京

九年ぶりに元旦の陽をあびにけり夫の仕舞ひし屠蘇器とお重婿ふたり孫ふたり増え正月の鯛をわが焼く夫のかはりにうんちくを垂れつつ三段重ひらく夫がお屠蘇を注ぎぬるごとく九十一の母の好める栗きんとん、錦玉子は甘さ控へてIGA腎症と子に病名のつきたり赤き椿咲く午後



桑原正紀歌集 令和元年9月刊 一六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

秋夜吟 コスモス叢書第1166篇 青磁社

著者住所 〒173-0037 東京都板橋区小茂根三一九一八一〇六

木畑紀子歌集 令和元年7月刊 一七〇〇円(税別) 送料三〇〇円

かなかなしぐれ コスモス叢書第1157篇 現代短歌社

著者住所 〒610-0357 京都府京田辺市山手東一一二二二〇

大野英子歌集 令和元年9月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

甘藍の扉 コスモス叢書第1159篇 柘書房

著者住所 〒812-0028 福岡県福岡市博多区須崎町三一六一一三〇二

島田暉歌集 令和元年9月刊 一六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

記憶の炎 コスモス叢書第1162篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市瀬谷区本郷一一一四一六